

◆2019年3月期連結業績

売上高は前年同期比 19 億 12 百万円増、0.8%アップの 2,509 億 42 百万円、営業利益は米国子会社の収益改善などがあったものの、原燃料価格の上昇などをカバーするまでには至らず、同 21 億 18 百万円減、10.5%ダウンの 179 億 77 百万円となった。経常利益は前年同期比 3 億 96 百万円減、2.2%ダウンの 179 億 93 百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度に米国子会社においてのれんの減損損失 10 億 41 百万円、事業構造改善引当金繰入額 10 億 24 百万円を計上したこともあり、同 16 億 80 百万円増、14.9%アップの 129 億 37 百万円となった。

リンテック単体と連結子会社の業績については、売上高は単体が前年同期比 17 億 2 百万円減、1.0%ダウンの 1,686 億 33 百万円、連結子会社が同 9 億 22 百万円増、0.7%アップの 1,266 億 20 百万円となった。営業利益は単体が前年同期比 39 億 12 百万円減、29.5%ダウンの 93 億 47 百万円、連結子会社が同 17 億 62 百万円増、25.9%アップの 85 億 70 百万円となった。

売上高は、単体では洋紙事業部門、産業工材事業部門が堅調に推移したが、アドバンストマテリアルズ事業部門が期後半に半導体市場の低迷の影響を受け減少したほか、印刷・情報材事業部門、加工材事業部門も低調に推移した。連結子会社では、アドバンストマテリアルズ事業部門の台湾販売子会社が減少となったほか、米国子会社が円高の影響を受けて円貨換算額が目減りしたが、その他の連結子会社は総じて堅調に推移した。

営業利益は、単体では主な減益要因として販売数量の減少および売上構成の悪化で約 12 億円、原燃料価格の上昇で約 22 億円などがあった。連結子会社では増収効果に加え、マディコ社において業績が大幅に改善した。

セグメント別では、印刷材・産業工材関連の売上高は、印刷・情報材事業部門が前年同期比 5 億 14 百万円減、0.6%ダウンの 866 億 18 百万円、産業工材事業部門が同 17 億 59 百万円増、5.1%アップの 363 億 17 百万円となった。セグメント全体の売上高は前年同期比 12 億 44 百万円増、1.0%アップの 1,229 億 35 百万円、営業利益は米国子会社の収益改善などもあり、同 7 億 20 百万円増、23.7%アップの 37 億 61 百万円となった。

当セグメントの事業部門別売上高の概要については、印刷・情報材事業部門は、シール・ラベル用粘着製品が国内では宅配・通販関連や化粧品などのアイキャッチラベルの需要が堅調だったものの、期前半の自然災害や酷暑などの影響を受け食品・飲料関連が低調に推移した。海外ではアセアン地域において堅調に推移したが、中国国内で需要が低迷したほか、米国子会社で円高による目減り影響を受けた。産業工材事業部門は、国内では通販向け装置が堅調に推移した。海外では二輪を含む自動車用粘着製品がインドやアセアン地域において順調だったほか、ウインドーフィルムが好調に推移した。

電子・光学関連の売上高は、アドバンストマテリアルズ事業部門が前年同期比 14 億 11 百万円増、2.7%アップの 530 億 44 百万円、オプティカル材事業部門が同 22 百万円増、0.1%アップの 372 億 71 百万円となった。セグメント全体の売上高は前年同期比 14 億 33 百万円増、1.6%アップの 903 億 16 百万円、営業利益は同 8 億 21 百万円減、6.9%ダウンの 111 億 50 百万円となった。

当セグメントの事業部門別売上高の概要については、アドバンストマテリアルズ事業部門は、半導体関連粘着テープが市場の生産調整の影響を受け減少し、半導体関連装置は設備投資抑制の影響を受けたものの前年同期並みとなった。積層セラミックコンデンサ関連テープについては、スマートフォン、車載、サーバー用などの需要が好調であったことにより増加した。オプティカル材事業部門は、光学ディスプレイ関連粘着製品がスマートフォン用などで期後半に需要低迷の影響を受けたが、大型テレビ用は

年間を通じて順調に推移した。

洋紙・加工材関連の売上高は、洋紙事業部門が前年同期比 2 億 31 百万円増、1.4%アップの 166 億 72 百万円、加工材事業部門が同 9 億 98 百万円減、4.5%ダウンの 210 億 17 百万円となった。セグメント全体の売上高は前年同期比 7 億 66 百万円減、2.0%ダウンの 376 億 89 百万円、営業利益はパルプを中心とした原燃料価格上昇の影響を受け、同 20 億 25 百万円減、40.5%ダウンの 29 億 70 百万円となった。

当セグメントの事業部門別売上高の概要については、洋紙事業部門は、隠ぺい性を付与した封筒用紙やファストフード向けの耐油耐水紙などが順調に推移した。加工材事業部門は、炭素繊維複合材料用工程紙は順調だったものの、一般粘着製品用、電子材料用剥離紙が低調に推移した。

◆2020 年 3 月期連結業績予想

売上高は前年同期比 91 億円増、3.6%アップの 2,600 億円、営業利益は同 10 億円増、5.7%アップの 190 億円、経常利益は同 5 億円増、2.8%アップの 185 億円、親会社株主に帰属する当期純利益は同 6 億円増、4.3%アップの 135 億円と予想している。売上高は単体で前年同期比 41 億円増、2.4%アップの 1,727 億円、連結子会社で 63 億円増、5.0%アップの 1,329 億円を見込んでいる。営業利益は単体で前年同期比 17 億円増、18.3%アップの 110 億円、連結子会社で 7 億円減、8.1%ダウンの 79 億円と見込んでいる。単体では増益要因として、販売数量の増加などにより 19 億円、原燃料価格の下落で 2 億円、原価低減効果で 6 億円、一方、減益要因としては人件費など固定費の増加で 10 億円を見込んでいる。連結子会社では、増収効果はあるものの、単体との利益配分の見直しや人件費、広告宣伝費などの固定費の増加もあり 7 億円の減益を見込んでいる。

セグメント別では、印刷材・産業工材関連の売上高は、印刷・情報材事業部門が前年同期比 48 億円増、5.4%アップの 919 億円、産業工材事業部門が同 11 億円増、3.2%アップの 369 億円と見ており、セグメント全体の売上高は前年同期比 59 億円増、4.8%アップの 1,288 億円、営業利益は同 8 億円増、22.3%アップの 46 億円と見込んでいる。

当セグメントの事業部門別売上高の見通しについては、印刷・情報材事業部門は、国内で飲料用キャンペーンラベルや化粧品などのアイキャッチラベルの販売数量が増加すると見ているほか、環境配慮製品を市場投入することにより拡販を図っていく。海外では、リンテック・インドネシア社での粘着紙の増産に加えて、冷凍食品の包装や物流用途に最適なマックタック・アメリカ社のホットメルト製品をアセアン地域において拡販していく。産業工材事業部門は、二輪を含む自動車用粘着製品がインドやアセアン地域において引き続き堅調に推移すると見ており、加えて、自動車用ウインドーフイルムがインドネシアで新規採用となることにより増収を見込んでいる。

電子・光学関連の売上高は、アドバンストマテリアルズ事業部門が前年同期比 3 億円増、0.5%アップの 528 億円、オプティカル材事業部門が同 14 億円増、3.7%アップの 392 億円と見ており、セグメント全体の売上高は前年同期比 17 億円増、1.9%アップの 920 億円、営業利益は 12 億円減、10.3%ダウンの 100 億円と見込んでいる。

当セグメントの事業部門別売上高の見通しについては、アドバンストマテリアルズ事業部門は、半導体関連粘着テープが年後半には需要が回復してくると予想しており、前年同期並みの売上高になると見ている。半導体関連装置は設備投資抑制の影響を受けると想定しており、前年同期と比べ減少すると見ている。積層セラミックコンデンサ関連テープは車載、産業用などの需要が堅調に推移すると見ている。オプティカル材事業部門は、大型テレビの需要が堅調に推移すると想定しており、増加を見込んでいる。

洋紙・加工材関連の売上高は、洋紙事業部門が前年同期比 8 億円増、5.0%アップの 175 億円、加工材事業部門が同 7 億円増、3.2%アップの 217 億円と見ており、セグメント全体の売上高は前年同期比 15 億円増、4.0%アップの 392 億円、営業利益は 14 億円増、48.1%アップの 44 億円と見込んでいる。

当セグメントの事業部門別売上高の見通しについては、洋紙事業部門は、耐油耐水紙が堅調に推移すると見ているほか、価格改定効果もあることから増加を見込んでいる。加工材事業部門は、剥離紙が前年同期に比べ回復するほか、合成皮革用工程紙が堅調に推移すると見ている。

2019 年 3 月期の設備投資額は、前年同期の 101 億円に対し 6 億円減少の 95 億円となった。主な内容としては、熊谷工場での剥離紙塗工設備、吾妻工場での剥離フィルム塗工設備、マディコ社での生産拠点再構築などがあった。2020 年 3 月期は、吾妻工場での剥離フィルム塗工設備、マディコ社での生産拠点再構築などの継続案件に加え、温室効果ガス削減対応設備などにより 113 億円の設備投資を予定している。2019 年 3 月期の減価償却費は、前年同期の 90 億円に対し 3 億円減少の 87 億円となった。2020 年 3 月期は、88 億円を見込んでいる。なお、2020 年 3 月期の のれんの償却額は、前年同期並みの 32 億円を見込んでいる。2019 年 3 月期の研究開発費は、前年同期の 79 億円に対し 4 億円増加の 83 億円となった。2020 年 3 月期は、87 億円を見込んでいる。

2019 年 3 月期の年間配当金は 1 株あたり 78 円とし、連結配当性向は 43.5%となった。2020 年 3 月期は連結当期純利益予想 135 億円、1 株当たり当期純利益 186 円 97 銭を前提に、1 株当たり年間配当金 78 円を予定している。これにより連結配当性向は 41.7%になると見ている。

現在推進中の中期経営計画「LIP-2019」は、4 月から最終年度に入った。数値目標の達成は難しい状況だが、計画で掲げた各施策を最後まで推し進め、将来に向けた成長基盤づくりに、グループ全社員一丸となって邁進していく。

◆質疑応答◆

・今期(2020年3月期)の電子・光学関連セグメントの営業利益予想を前期比10%減とした理由は。

アドバンストマテリアルズ事業部門では、昨年の後半より低迷している半導体関連製品の需要回復が下期以降になると想定しており、部門全体の売上構成の悪化によって収益性が低下すると見ている。またオプティカル材事業部門においては、売価の下落および研究開発コストをはじめする固定費の増加を見込んでいる。

・前期はパルプを中心に原燃料価格が上昇して収益を圧迫したが、今期の見通しは。

パルプ価格は前期(2019年3月期)実績が88.01円/kgだったのに対し、今期は87円/kgを想定しており、利益への影響額はプラス1億円を見込んでいる。またナフサ価格については、前期実績が49,500円/k1だったのに対し、今期は48,000円/k1を想定しており、利益への影響額はプラス1億円を見込んでいる。1月～3月期はパルプ、ナフサともに価格が底値水準だったが、今後は徐々に上がっていくという前提で、通期での原燃料価格下落の効果はトータルでプラス2億円程度と予想している。

・洋紙・加工材関連セグメントの値上げ効果については。

洋紙を中心に、前期末までに価格改定の交渉はほぼ終了しているが、値上げ前の駆け込み受注があったため、前期における効果は限定的だった。今期はセグメント全体で7億円程度の効果を見込んでいる。

・マックタック・アメリカ社との相乗効果の創出は。

リンテックの販路を使ったマックタック製品の販売実績が東南アジアで出てきている。一方、マックタック社の販路を使ったリンテック製品の拡販も進めているが、こちらについてはまだ実績数値としては小さく、今後より一層強化していかなければならないと考えている。また、環境面やコスト面での優位性を持つマックタック社のホットメルト粘着製品の改良を進めており、日本の高い要求品質を満たす新製品の開発を目指している。

以上